

### 3 秘文書が導く天ノ七宝坂しっぽうざかの埋宝（千葉県）

一九七八（昭和五十三）年の九月、秋風が吹き始めるころには、ぼくの埋蔵金熱も少しさめかけていた。

前年からこの年の夏にかけて、埋蔵金研究の権威である畠山清行氏の指揮のもと、徳川幕府の御用金その他を求めて、群馬県の永井で汗だくの発掘を続け、ついに、当初の目的だった謎の横穴は発見できたものの、その中に財宝はなく、がっかりして引き揚げてきたばかりだった。

埋蔵金探しの難しさをいやというほど知らされたの

は、ぼくだけではない。「何かが見つかるはず」「手ぶらで帰ることはないだろう」という確信があっただけに、四人の仲間の落胆ぶりははなはだしく、東京に戻ってからしばらくは、埋蔵金の「ま」の字も出ないほどだった。

そんな気持ちのすきまを埋めるかのように、突然ぼくの前に現れたのが、山城赤心氏やましろせきしんである。

この四年間、ぼくたちの発掘のことが、新聞やテレビで紹介されると、いろいろな人から電話がかかってきたり、手紙が舞い込んだりしていた。単なる激励のメッセージもあったが、中には「自分も同じように埋蔵金を探している。機会があったら、協力してやりましょう」といっ

た、同好の士からの呼びかけもあった。札幌在住のサラリーマンもいれば、愛知県に住むソニーのエンジニア、関西方面の古銭の流通業界に詳しい人もいる。山城氏もそのうちの一人で、東京在住だったし、最初の電話で直接会うことを約束させられた。

休日に、渋谷の喫茶店で待ち合わせることにしたのだが、先に到着していた相手は、ぼくの顔をよく知っていたとみえ、ガラスの自動ドアが開いたとたん席を立ち、一歩か二歩、歩み寄って手を差しのべてきた。日本人にしては珍しい習慣をもつ人だ。やせ形で背が高く、髪を肩まで垂らしていて、ひところの全共闘の闘士を思わせ

た。一歩まちがえばイヤミになるほどの知性も感じさせる。

山城氏は、席に座ると早速自己紹介を始めた。一九四七（昭和二十二）年の生まれだから、ぼくと同じ。団塊の世代で、全共闘世代。角材は振り回さないまでも、デモにはけっこう参加していたらしい。

彼と埋蔵金の出会いは、作り話に思えるほどドラマチックだ。

ピアニストをめざしていた山城氏は、大学時代に練習のやり過ぎで右腕の腱にダメージを受けた。それに失恋が追い打ちをかけて人生に絶望し、放浪の旅に出た。そ

して、とある山中で滝に打たれていたときに、一人の修験者と出会い、埋蔵金の話を聞く。とくに興味をもったのは、財宝の埋蔵に應用されているという古兵法「八門遁甲」だった。

これは、中国の三国時代の天才軍師、諸葛孔明（しょかつこうめい）が、『孫子』（そんし）に代表されるそれまでの兵法や、占星術、風水学、観相などの占法を集大成したもので、最強の軍学といわれた。日本に入ってきたのも古く、『日本書紀』に推古天皇の時代に百済を経て伝わったとある。その後、日本風にアレンジされて、楠木正成（くすのきまさしげ）などが実戦でこれを使つたらしい。ただし、八門遁甲を学んだのはごく限られた

人々で、しかも、絶対に書物などにして残さず、後継ぎだけに口授くじゅくでん口伝で伝えることを習わしとしていたから、資料はまったく残存していない。占いの一種に「奇門遁きもんとん甲こう」というのがあるが、これは八門遁甲の変形と思われる。

以上の話を、前置きとして山城氏から聞いたのだが、彼はそれを教えるために会いに来たわけではない。それくらいの知識をぼくがもちあわせていることを前提に、相談をもちかけてきたのだ。正直なところ、当時のぼくは、彼の期待にせいぜい七割程度しか応えられなかったと思うが、それは別として、相談事とは、山城流の八門

遁甲の解読で、ある埋蔵金のありかがわかったので、協力してほしいということだった。

それまで、彼は何人かの仲間といっしょに、数力所の伝説地を調査していた。群馬県の赤城山周辺は徳川の御用金探しを目的として、また、村上水軍の財宝を求めて、香川県の小豆島まで行っている。だが、彼らはまだ実際に発掘をやったことがない。掘るノウハウをもっていないので、ぜひ力を借りたいというわけだ。

彼が掘りたいのは、千葉県市原市いちばら。案外近いところだった。ターゲットは成島家なるしまの埋蔵金。

喫茶店では詳しい話が聞けないので、日と場所を改め

て、説明してもらおうことにした。こちらも仲間を集めて  
いっしょに聞き、合意がなされれば協力をするつもり  
だった。

なお、山城赤心というのは、もちろん彼の本名ではな  
い。事情があつて、本名を明かすことはできないが、ペ  
ンネームというか何というか、そのへんな名前は、彼が  
生涯をかけて謎解きに挑戦するつもりでいる、徳川幕府  
御用金ゆかりの地名に由来する。すなわち、「心は赤城  
山にあり」をひっくり返したものだ。

成島家の埋蔵金のことを耳にするのは、これが初めて



ではなかった。その前年に知り合った東京在住の埋蔵金  
研究家、山下三基夫やました みきお氏が、やはり自分なりの八門遁甲の  
知識で、その解明に情熱を傾けていたからだ。

山下氏と山城氏の話に共通していたのは、八門遁甲の  
法には必ず最初に「道あかし」があり、そこを出発点と  
して謎文の暗示に従って進んでいけば、途中に物証が現  
れ、最終地点へ導かれるということ。また、方角その他  
は、気学で用いる一白いっぱくから九紫きゅうしまでの九要素、易の八要  
素、十干十二支、五行などで表すという。

ぼくは畠山氏からも八門遁甲の基礎知識を与えられて  
いた。一つは、埋蔵地を示すのは謎文と物証のセットで

あること。また、物証として、自然物では目印になるような山や大木、大きな岩、人工物では神社・仏閣をはじめ、石碑や石宮などが利用されているらしい。何十年、何百年たっても位置が変わる可能性の低い「不動のもの」が要注意というわけだ。ただ、畠山氏は、八門遁甲によって行われた埋蔵は、赤城山の徳川幕府御用金と、多田銀山の豊臣秀吉の黄金以外にはないと考えていた。

さて、市原市郊外の金剛地こんごうちというところにある成島家は、七、八百年も続く旧家で、戦国時代には、後の名主のような存在だったらしく、土気城主とけしゅだった酒井康治さかいやすはるが、一五九〇（天正十八）年、豊臣秀吉に背いて敗れたとき

に軍用金を預かり、江戸時代の半ばにそれを埋蔵しているのである。

そのことを示す文書が同家から見つかったのは、江戸時代も終わりに近い一八四九（嘉永二）年のことだった。当主の成島七郎左衛門が蔵の整理をしていたときに、屋根裏にあった空の千両箱の中から出てきたもので、一つには、

「二八

むしはらむ

五五

十二

八十一

九十

ニシテ是ヲ終ル

黄金二千八百枚也

宝曆二年三月之ヲ埋ム

天ノ七宝坂ノ入口

砂中ノ石櫃ノ中ニ在リ

申西亥ノ庫ニ之ヲ蔵ス」

と書かれていた。

また、もう一枚小さな書きつけがあり、こちらには、

「ヒイフクフクライ 小判三」

とあった。

七郎左衛門は、祖父から屋敷内に財宝が埋まっていると聞かされていたので、早速発掘にとりかかった。しかし、文の意味もわからず、ただやみくもに掘っただけで、それから八十年以上、三代にわたる探索の成果といえは、「羊」と「扇」と「蔵の鍵」の絵をかたどった三枚の漆喰の板が見つかっただけ。この漆喰板は、いまでも謎文を解く手がかりだといわれている。

同家では手に負えなくなったため、昭和の初めになって文書を一般公開した。すると、全国から一攫千金を狙う探索者がわんさと押しかけてきた。屋敷内は掘りつく

されていたので、彼らは周辺を掘ったのだが、結局、何も出てこなかった。

ほとんど忘れられていたこの謎文の解読に挑戦した山城氏は、デスクワークと現地調査をくり返ししながら、次のような結論に到達した<sup>たいきよく</sup>のである。

まず、頭の「二八」を「二」と「八」に分けると、「二」は易でいうところの大極、つまりすべての始まりだからスタート地点で、それは成島家にちがいない。「八」は、続く「むしはらむ」とあわせて「八卦<sup>はっけ</sup>」(易)をたてることだろう。易には乾(けん)・兌(だ)・離(り)・震(しん)・巽(そん)・坎(かん)・艮(ごん)・坤(こん)の

八つの小成卦しょうせいけがあり、これを二つ重ねた六十四の大成卦だいせいけを基本にして占う。「むし」はつまり「六四」で、「はらむ」を「祓む」（易占を行う）と解した。

続く数字についてだが、彼は「五五」と以下の「十二、八十一、九十」とは分けて考えるべきだと思った。というのは、「十二」以下は十の単位数字が入っているが、「五五」にはないからだ。すると、これは大成六十四卦のうちの五の五の象しょう「巽為風（そんいふう）」を表すものではないだろうか。

易の六十四の象は、森羅万象、すなわち自然界のしくみ、人の営みのすべてを説明するもので、それぞれにさ

まざまな意味が込められている。「巽為風」が表す方角は東南。漆喰板の扇も風と関係があり、同じ象に属する。また、鍵は八卦の「艮」の象に属し、艮は寺や神社を表す。もう一枚の漆喰板の羊は「兌」の象に属し、兌は金物や貨幣を表す。これらを結びつけると、「成島家から東南の方角に寺か神社があり、そこに貨幣が埋蔵されている」と解釈できるわけだ。

事実、そこには本宮寺ほんぐうじという日蓮宗の古い寺があった。山門に向かう道は急な上り坂になっている。これが「天ノ七宝坂」だろう。あとは、寺のどこかに次の基点を見つけ、そこから申（さる・西南西）・酉（とり・西）・亥（い・



北北西)の方角へそれぞれ「十二、八十一、九十」とたどればいい。

山下三基夫氏も、財宝探しを文書の暗号解読から始めた人物で、出会ったときは珍しい人もいるものだと驚いたが、山城氏はその上をいっている。こじつけと感じられる部分が少ない。ぼくたちは、最初に財宝の埋蔵地と目される場所を見つけ、発掘をやりながらなぜそこに隠されているというのか、理論を後付けしてきたが、彼は実在する文書の分析と謎の解読から入っている。やり方としては、こちらのほうが正しいのではないかと、正直そのときは思った。

「おもしろいじゃないですか。掘ってみましようよ」

ぼくは手応えを感じて、この話にのつてもいいと思つた。同席していたのは、イラストレーターの白井正樹さん、全日空パイロットの宮本憲一君、同じく全日空の古園井俊夫君らだったが、この三人がやる気になった。あとは、現地でポイントを絞り、地主と発掘の交渉をするだけ。

山城氏は、自分の仲間が二人、この計画に参加すると言う。ぼくのほうは、Tさんにも声をかけることにした。彼は、本職はタクシートの運転手だが、半年間は仕事をや

らずに各地で埋蔵金探しをやっている。夏場が活動のピークで、ここ数年は富山県の立山に近いくわさきやま鋸崎山に通つて、さつさなりまさ佐々成政の軍用金にアタックしていた。

成政は戦国時代末の武将で、富山城主だったところに豊臣秀吉と対立し、孤立無援の状況を打開するため、徳川家康と同盟を結ぼうと、厳冬の北アルプスを越えて浜松へ向かった。結局、その直前に家康と秀吉が和睦していたので同盟は成立せず、富山城は秀吉に攻められてあっさり落城する。軍用金は、成政が浜松へ向かう途中、あるいは富山城が落城する直前に、北アルプス山中の洞窟に隠されたといわれ、金額は百万両。日本の埋蔵金の中

でもベストテンに入る有名な伝説である。

畠山氏の本によると、明治の半ばごろ、軍用金を探り当てた人物がいて、それが新たな伝説を生み、現代のトレジャーハンターの中にも興味をもつ人は多い。なぜなら、黄金が隠されていた洞窟は、人を寄せつけない深山にあるため、そこを探り当てた人物はほんの一部しか持ち出すことができず、大部分はまだ人知れず眠っているらしいのだ。

そして、持ち出された「笹金」の極印を打った金の延べ板が数枚、地元で発見されたという話もある。明治時代に旅館をやっていた大山町のM家にも、そのうちの1

枚が伝わっているが、二人の男が「世話になったお礼に」と、置いていったものなのだそうだ。Tさんは当時、そのM家の子孫にあたる人といっしょに、本命と思われる楸崎山を調査していた。

「大きな岩に刻まれた矢印を発見したんですよ」

得意になって彼が見せてくれた一枚の写真は、そう見えないこともないという程度のもので、人為的に彫られたものかどうかも怪しかった。

また、Tさんは群馬県永井の発掘に最終段階で参加している。ぼく自身がトンネル内での調査に二週間もつきあえなかったので、後半、代理として行ってもらったの

だ。彼は苦勞して通販で手に入れたアメリカ製の金属探知機を持ってゐるし、それがきつと役に立つだろうと考へたのだが、実際に、探知機はトンネル内で何度か反応して、畠山氏ほかのメンバーを一喜一憂させるだけの効果はあつた。

「埋蔵金マニアつて、意外に多いもんですね」

山城氏は言つた。ぼくも同感だつた。しかも、年輩の人だけでなく、同世代の若者たちの中にも、埋蔵金に興味をもつ者がいる。

「同好の士の組織をつくつてもいいですね」

その提案は山城氏から出されたものだったが、以前か

らぼくも同じことを考えていた。これまで、埋蔵金で失敗した人たちは、例外なく独りよがりになっている。思いいこんだら最後、誤りに気がつかないまま、我を忘れて突き進んでしまっている。大事なのは、自分の調査や分析の結果を客観的に見直すことだ。そのためには、人の意見を聞く場、情報を交換する場があつたほうがいい。

また、手助けが必要なことだつてあるだろう。そんなとき、関心のない知人に頼るより、たとえ見ず知らずの他人でも、興味のある人のほうが力になるはずだ。

「賛成です。実は前から名称も考えていたんですよ。日本トレジャーハンティング・クラブってね」

ぼくが言うと、山城氏は膝をたたいた。

「それそれ、それしかないですよ。ぼくの案とぴったり同じだ」

「畠山先生に顧問になつてもらいましよう」

こうして、ついに日本で初めての埋蔵金探しのクラブが発足することになった。横文字にしたのは、夢やロマに結びつけたかったから。いまでこそ「トレジャーハンティング」とか「トレジャーハンター」という言葉は認知されるようになってきたが、当時は理解してくれない人のほうが圧倒的に多かった。埋蔵金探しは、社会通念からいうといかがわしい行為であり、それがまるで自



分の宿命であるかのように神がかり的になったり、借金で首が回らなくなつて、しかたなく一発大逆転を狙う人が大半を占めていて、「山師」とか「金掘りかね」とか「一発屋」などといった、蔑さげすんだ呼称がつけられていた。

だが、アメリカあたりでは、海岸に打ち上げられる沈没船の財宝探しなどが、ふつうの人が気軽に取り組めるレジャーの一つとして普及していることを雑誌などで知り、自分たちの埋蔵金探しも、それに近い形にイメージチェンジをはかりたいと考えるようになっていたのだ。

(これはチャンスだ。宝探しの世界が変わるかもしれないぞ)

ぼくはそんな予感を抱いた。早速、大分のチアキにも連絡をとり、九州支部長になってもらうことにした。会員数二十四名、北海道から九州まで、全国をカバーする大組織ができあがった。そして、クラブの発足を記念するプロジェクトが、千葉県の市原市で展開されることになったのである。

成島家に伝わる文書には、「黄金二千八百枚也」を埋めたと書かれている。ぼくはまず、それがいったいどんなものかを知りたかった。

貨幣関係の資料を調べると、江戸時代に「黄金」とい

うと、ふつう大判のことをさしたと解説されている。大判の価値は変動したが、基本的には一枚十両だったから、トータル二万八千両ということか。いや、どうもそうではないらしい。

埋蔵されたのは、江戸時代中期の一七五二（宝暦二）年三月だが、もとは戦国武将で土気城主だった酒井康治の軍用金だから、江戸時代の大判であるはずがない。また、豊臣秀吉がつくった「天正大判」を、康治が持っていたはずもない。なぜなら、康治は、秀吉が小田原の北条氏を攻めた際に、北条方について敗れたからだ。秀吉が戦功のあった武将に恩賞として与えた大判を、敵方の

酒井康治が持っていたとは思えない。となると、この「黄金」は何をさすのか？

室町時代から戦国時代にかけて、各地の国人、武將は金銀山を開発し、金貨や銀貨をつくった。形はさまざまだが、多くは金一両が四匁（十五グラム）から四匁五分（約十七グラム）で、本格的な流通貨幣ではないものの、全国共通の基準ができていた。なお、「両」はもともと中国から伝わった重さの単位で、律令制のもとでは一両が一斤の十六分の一、約四十二グラムとされていた。それが室町期に改められたようだ。

一両金貨としては、甲斐の「甲州一両露金」つゆきん「甲州碁じ

石金いしきん」のほかにも、陸奥むつの「伊達鶴小判だてつる」「永字金えいじ」、出雲いずもの「吉豆小判金」、播磨はりまの「赤松小判金あかまつ」、越後の「上杉桐判金」などがある。もしかしたら、酒井家の軍用金も一枚一両のいわゆる私鑄貨幣しちゅうだったかもしれない。

これらは現存するものがきわめて少なく、古銭市場ではかなりの高値で取り引きされている。最低でも一枚百万円はするようだ。それが二千八百枚あるとしたら、単純計算で時価二十八億円。いや、それ以上の価値があるかもしれない。

その年の九月末、ぼくは山城氏の案内で初めて現地を訪れた。千葉県市原市金剛地。金が出てきてもよさそう

な地名だ。房総半島の付け根の部分のほぼまん中にあり、たんぼや畑の多い、ひっそりとした農村地帯である。

山城氏が目をつけた日蓮宗の本宮寺は、確かに、伝説発祥の成島家から見て東南の方角にあった。こんもりした台地の上に建ち、杉林と竹やぶに囲まれている。県道一・二七号五井・本納線から、たんぼの間を通る道に入り、二百メートルほど進むと山門の下に出る。山門までの細い道は急坂になっているから、なるほど、これが謎文に出ている「天ノ七宝坂」かもしれない。

境内に入り、その中ほどに立つと、山城氏は言った。

「何かに気がつきませんか」



天ノ七宝坂と思われる坂道を上り詰めたところに本宮寺の山門がある。

ぼくは三百六十度、ぐるりとあたりを見回した。山門の左脇に、けっこう立派な鐘楼があり、正面に古い本堂が建つ。本堂の左側に庫裏が、そして右側に墓地がある。そういった人工物ばかりに目をやっていると、彼はじれったそうにつぶやいた。

「木ですよ、木」

ハッと視線を上げると、まず、一本の大木が目についた。針葉樹にちがいないが、種類まではわからない。

「カヤです。あんな大木はこのあたりでは珍しいですよ。秋には赤い実をいっぱいつけますからね。目立ちますよ。あれが北の角にあるわけです」



そういわれて、ぼくは反射的に南側にも目をやった。すると、南の角にはイチヨウの大木があった。まだ葉は青かったが、黄葉するとこれも見事なものだろう。

「調べたんですが、どちらも樹齡は二百年以上です。黄金を埋藏したのが、江戸時代の宝暦二年、西暦でいうと一七五二年ですから、いまから二百二十六年前。年代的にもだいたい合うんですよ」

「なるほど、この寺を埋藏地を示す第二の基点にするため、目印となるような木を二本植えたというわけですか」  
「そう、南北の角にね。八門遁甲で最も重要な方角は南北です。次に鬼門の東北と裏鬼門の南西。実をいうと、

この寺は、酒井康治の土気城の裏鬼門にあたっています」  
ぼくはうなつた。トレジャーハンターとして当然のことではあるが、さすがによく調べている。

「ただ、寺全体が第二の基点ではないはずですよ。ここからはもうピンポイントを探る作業ですから、基点も絞り込む必要があります」

山城氏は続けた。彼がもう結論を出していることは知っていたので、ぼくは黙って次の言葉を待った。

「北のカヤはダメでした。申、酉、亥の方角はすべてたんぼ。たぶん昔からたんぼだったと思うし、小川が流れている。そんなところに埋めるはずないですよ。結局、

南のイチヨウを第二の基点とすることにしました。山門という考え方もあるんですが、これも、点を決めるのは難しいし」

「いいじゃないですか、イチヨウで。それでやってみましょうよ」

ぼくは全面的に山城氏の推理を支持した。あとは、申（西南西）、酉（西）、亥（北北西）の方角へ、それぞれ「十二、八十一、九十」と、たどっていけばいい。単位が何かははっきりしないが、歩数、尺、間など、何通りかやってみれば、それらしい場所に行き着くのではないだろうか。

山城氏がいちばん心配していたのは、はたして地主が発掘を許可してくれるだろうかということだ。彼はまだ、そういう交渉をした経験がない。しかも、ここはかつて埋蔵金探して賑わった土地だけに、地主が「騒ぎはもうごめんだ」と、許してくれない可能性がある。そこで、ぼくが交渉をアシストすることにした。自慢ではないが、これまで、それに失敗したことはない。

結果として、三カ所の発掘予定地は、「天ノ七宝坂」の南側にある杉林にかたまったので、ぼくはまず、寺の住職に話をもつていくことにした。そこが寺の所有地なから話は早い。もう四十年以上も前のことなので、はつき

りとは覚えていないが、

「土気城主酒井氏と、このお寺のつながりについて研究しているんですが、周囲から何らかの資料が出土する可能性がありますので、発掘調査にご協力願えませんかしょうか」

というふうに切り出したと記憶している。すると、市原の市役所に勤務する公務員でもある住職は、かなり興味を示し、その土地の所有者に話をしてくれ、すんなりと許可を得ることができたのである。

十月七日の夕刻、山城氏とぼくを含めた八人が、三泊

四日の予定で現地入りした。現地といっても、近くに旅館がないので、しかたなく、九十九里浜に面する大網白里町の民宿に泊まることにした。ここから発掘現場までは、車で二十分ほどかかる。

民宿を予約した山城グループのKさんは、笑いながらこう話した。

「いまはシーズン・オフでしょう。三泊したいといったら、民宿のオヤジが、あまりいい返事をしないんですよ。このところ人を泊めていないからなあって。そのあと、どちらさんですかかってきくので、JTCですが、と答えると、態度がコロッと変わりましてね。ハイハイ、どう

ぞどうぞって。たぶんJTBとまちがえたんじゃないかな」

なるほど、宿泊施設が旅行会社をないがしろにするわけにはいかない。こんなところに組織をつくった効果が現れるとは、思ってもみなかった。シヨベルやツルハシをかついだ旅行業者なんて、いるはずがないのだが。

さて、翌日から、ぼくたちはあらかじめ決めておいた三カ所を、分担して同時進行で掘ることにした。十月上旬というのは、天候が安定している時期で、雨の心配はまったくない。

拍子抜けだったのは、見学にやってくる人が一人もい

なかったこと。これまでは、天草でも群馬でも、たいいてい近所の人それぞれとなく様子を見に来ていて、ちよつと大げさに説明してやったりするのが、息抜きにもなっていた。人目につきにくい林の中ということもあったのだらう。

わりあい掘りやすい土質で、穴掘りは順調に進んだ。一日目に三メートル、二日目には目安にしていた五メートルに達し、地下水がわいてきた。水が出るまでと決めていたから、これで終わりだ。成果はまったくなし。

念のため、穴の周囲と底に、Tさんが持ってきた金属探知機をかけてみたが、まるで反応がなかった。



ぼくが掘った穴は、ほれぼれするほど、見た目がきれいだった。そのまま埋めてしまうのがもったいないほどだったので、林の中に不法廃棄されていたボロボロの電気洗濯機を埋めてやることにした。これで、少しは世の中の役に立つというものだ。

半分以上埋めたところで、今度は山城氏がワルノリを始めた。どこからか、平べったい石を見つけてきて、ツルハシの先で表に十文字の線を、裏に「宝」という字を刻み、ごていねいに十文字を東西南北にきっちり合わせ、穴の中に置いたのである。

「将来、ぼくとまったく同じように謎文を解釈して、こ

掘りながら周囲に金属探知機をかけたが反応なし（上）。「酉の庫」は掘りやすく、深さ5 mに達し、ここに電気洗濯機を埋めた（下）。



の場所にたどりつく者がいるかもしれないじゃないですか。そのころ、五メートルくらいの深さまでわかる金属探知機ができてるとすると、洗濯機に反応して、やっただぜと思うでしょうね。しかも、掘ってる途中で石板なんかが出てくるわけだから、狂喜するんじゃないですか」その様子を思い浮かべ、ぼくたちは腹をかかえて笑った。

目的は果たせなかったものの、山城グループの面々も、初めての本格的な穴掘りを心から楽しんでいた。でも、だからといって、このまま引き下がるほど根性なしの山城赤心氏ではなかった。

東京へ歸つたあと、ぼくはしばらく、この件から遠ざかっていたが、彼は次なる基点を求めて、何度か市原へ通っていたのである。

その結果、本宮寺山門の手前に、かつて豪農の古い屋敷があり、参道の左手に立派な長屋門が建っていたことがわかった。これが、成島家から正確に東南の方角にあたっていたことから、彼は、第二の基点を長屋門跡の中央に設定した。

そして、前回と同じように、そこから二方向へ十二尺、八十一尺、九十尺進んだところを、発掘ポイントと定めたのだ。なお、説明が前後するが、山城氏は、黄金

二千八百枚が、三カ所に分けて埋められたとは考えていなかった。八門遁甲的解釈から、黄金は酉の庫で、申の庫には酒井家の古文書類、亥の庫には刀剣、鎧・兜などの武具が入っているとみていた。

およそひと月後の十一月中旬、前回のメンバーから宮本君、Kさんを除く六人で、第二次発掘を行った。力を分散せず、一カ所を集中して掘ろうということになり、当然だが、まず酉の庫に手をつけた。

すると、二メートルほど掘り下げたところで、突然一方の壁に手応えがなくなり、シヨベルが吸い込まれた。横穴があったのだ。ぼくたちは一瞬息をのみ、顔を見合

わせた。

同じようなことを、ぼくと白井さんとコゾノイは、八月に群馬県新治村永井で経験している。でも、そのときは横穴があることがわかっていて、それをめざして掘っていたのだが、今度はまったく予想もしていなかったから驚いた。

「これが宝庫か！」

高さ約一・五メートル、幅六十〜七十センチというのも、永井の横穴とそっくりだ。ただ、奥行きはそれほどでもなく、T字型になっていて、奥行き約三メートル、その先が右に三・六メートル、左に四メートル続いている。

るだけだった。

むき出しに置いてあるものは何もなかったの、金属探知機をかけると、何方所かにかすかな反応はある。だがそれも、いつものように土中の鉄分だったようで、掘っても何も出てこないし、再度探知機をかけると反応がなくなつた。

「誰かに先を越された  
ということですかね」

山城グループのF君



が、肩を落としてつぶやいた。ほかのメンバーも、黙つてうなづくばかりだ。念のため、山城氏とぼくは、そこから五百メートルほど離れた場所に移転している地主の家を訪ねた。横穴に心当たりがないかきくためだ。

六十歳をこえたくらいの奥さんは、ぼくたちの報告にすぐ反応した。

「ああ、あれは、戦時中にイモを保存するために掘った穴ですよ」

「ええーっ、イモの穴ですか！」

山城氏は大声を上げ、苦笑した。

現場へ帰る途中、彼はぼくにこう言った。



「このことは二人だけの秘密にしておきましょうよ。ほかの連中は、宝庫を探り当てたけど、すでに誰かに掘り出されていたと思っっています。それでいいんじゃないですかね」

「そうですね。いまはある程度の達成感を味わっているわけだから、事実をバラしたらかわいそうですね」

ぼくは同意した。

「しかし、よくもまあ、あの穴にぶち当たったもんだ。偶然ですかね。それとも、イモの貯蔵庫を掘るときも、八門遁甲を使うんですか」

茶化したつもりはなかったが、山城氏は白い歯を見せ

ながら、ぼくの尻に蹴りを入れるまねをした。

第二次発掘を終えてしばらくたったころ、山城氏から茶封筒に入った書類が郵送されてきた。市原の発掘に関する報告書だ。B4の方眼紙五枚分の図面と、細かい文字でびっしり埋められた三枚のレポート用紙。几帳面で義理堅い性格らしく、協力を要請したぼくたちのグループに対して、はじめをつけたという気持ち表れが表れていた。もちろん、自分自身の調査活動の総括という意味も含まれていただろう。

ただし、例のイモの穴に関しては、

「結論として、X氏の偶然説、すなわち、この穴は本命であり、すでに盗掘されているとみる」

と述べられていた。つまり、過去の探索者であるX氏は、たまたま穴を発見して隠されていた財宝を手に入れた。八門遁甲による謎文の解読ではないという根拠は、この地点を酉の庫とするなら、当然申と亥の庫にも手をつけていなければならぬのだが、そこに該当する地点を発掘した痕跡が見受けられないからだ。

最後に、参加したメンバーにかすかな夢を残す意味か、「残る申と亥の庫も、『申十二または九十』『亥十二または九十』と解釈して試掘を行う必要あり」と結んでいた。

本人にその気がまったくないのを知っているのはぼくだけだ。

第二次発掘には、ぼくとコゾノイとTさんは東京から連日帰りで参加した。十月から十一月にかけて、正味わずか一週間くらいの房総通いだったが、東京近郊にこんなのかなかな田園地帯があることを、それまでは知らなかったし、期待感にあふれた興奮の日々は、またもや空っぽの横穴を掘り当てるといふ結果に終わったものの、群馬であいた心の穴を埋めるには十分だった。

(もう二度と金剛地に足を運ぶことはないだろう)

横穴の奥で、太い孟宗竹に参加者の名前と日付を書い

たものを持ち、代わりばんこに撮った記念写真を眺めながら、ぼくはそう思った。ところが、ここもそれで終止符が打たれたわけではなかった。以後二度も三度も通うことになる。

そのころ、ぼくのところは何度か電話をかけてくる人がいた。自分の知り合いに特殊な探知器を使って鉱物探しをしている人がいるから、一度試してみてはどうかと言うのだ。どんな種類の探知器かを問いたすと、どうもダウジングらしい。

ダウジングといえば、天草の件でイタリア人の神父の力を借りたことがある。摩訶不思議で、ワクワクさせら

れるものだが、畠山清行氏からは、「あの種のもものは気をつけないと危ないよ」と教えられていた。なぜなら、ダウジングは埋蔵金詐欺でよく使われる小道具だからだ。

詐欺師はまず、金の指輪か何かを座布団の下などに置き、その上に探知器をかざして反応の様子を示し、相手の関心をひく。相手というのは、たいてい埋蔵金探索者だから、じゃあ次は現場でという流れになる。現場では、ポイントだけでなく、埋蔵物の深さや量までもわかるよいうなことを言うので、ひっかかった人は法外な探査料を支払い、発掘に取りかかる。詐欺師のほうは、その時点

でドローンできたらしめたものだが、見つかるまで立ち会  
うよう求められるのがふつうだ。そして、示した深さま  
で掘って埋蔵金が出てこないと、再度探知器をかざして、  
「もっと深い」と言います。そして、すきをみてスタコ  
ラ逃げるのである。

畠山氏が一例としてあげた一九七五（昭和五十）年の  
北海道での事件は、ぼくが宝探しを始めて間もないころ  
だったから、鮮明に記憶していたし、当時の新聞や週刊  
誌の記事の切り抜きも保管していた。

その土地には、江戸時代の末ごろに海賊が隠した財  
宝の話が伝わっていて、昔から宝探しで賑わっていた

が、地元の不動産業者と木材業者が、時価百億円の砂金  
が埋まっているとだまされて大金をつぎこみ、ダンプ  
二千四百台分の土を掘り、標高三百メートルの山中に深  
さ二十三メートルの大穴をあけたのである。畠山氏によ  
ると、同一人物が、ほかでも似たような事件を起こして  
いるとのこと。また、その道具は「梶川式」かじかわのコピーだ  
とも言っていた。

「梶川式測定器」については、畠山氏の本に詳しく書  
いてあるが、昭和三十年代に埋蔵金の世界で話題になっ  
ている。これは、明治時代にアメリカに渡り、石油鉞脈  
の探査などに大きな実績をあげた梶川淳造じゅんぞう氏が使ってい



たものだ。長さ三十センチほどのひもの先に、小さな円筒をぶら下げただけの簡単な道具を用いて、帰国後も新潟県で石油の鉱脈を、三重県の賢島かしこじまで水脈を探り当てたという。そこで、うわさを聞きつけた埋蔵金探索者何人かが、有名伝説地での探査を依頼したのだ。

徳川幕府御用金で有名な群馬県赤城山をはじめ、太閤秀吉の黄金伝説がある兵庫県の多田銀山、結城家の埋蔵金で知られる茨城県結城市、富山城主佐々成政の軍用金が隠されたという黒部溪谷など。

そして実は、千葉県市原市でも、そのものズバリ、成島家の埋蔵金の探査に駆り出されているのである。

結果、梶川式にあぶり出された埋蔵金は一つもなかった。ただ、市原では、量はわずかだが砂金鉢が見つかったらしい。畠山氏が梶川氏本人に直接会って話を聞いたところによると、測定法は次のようなものだった。

まず、円筒の中に探したいと思うものと同じ物質を入れて片手にぶら下げ、もういっぽうの手に時計を持って歩き回る。目的のものに近づくと、彼の体から発する磁気の作用で円筒が引っぱられ、振り子のような往復運動を始める。そして、物体の真上に来ると、測定器の動きが円運動に変化して、その回転の速度と強さから、地下にあるものの深さや量が判明するという。これに興味を

もっていたぼくの仲間のTさんに、畠山氏が説明していたのを、ぼくは横で聞いていたことがある。

「梶川式は埋蔵金の世界では役に立たなかつたけど、アメリカで相当の実績を上げたのは事実らしい。だが、彼の特異体質によるもので、誰でもまねできるものではないと思うよ」

ところが、ものの本を読むと、必ずしもそうとはいえないようだ。天草の章でも述べたが、この種の探査道具のルーツは、古代エジプトの水脈占いにある。当時の占い師たちは、切ったばかりの二またに分かれた柳の小枝を両手に持ち、地面にかざして歩き回って、地下水のあ

る場所を探した。また、アフリカのサハラ砂漠に残る紀元前六千年ごろの岩面画には、古い棒らしいものを持つた人物が描かれているし、古代中国の伝説上の人物、禹う王おうも、古い棒を手にして描かれているとか。そして、科学者の中には、同じ物質は互いに引き合う性質をもってゐるから、みずみずしい小枝の水分が地下水脈に反応して、小枝が引っぱられる現象が起きるのだと説明する人もゐる。

中世のヨーロッパでは、錬金術とともに、この不可思議な古い棒「ダウジング・ロッド」の研究がさかんに行われたようだ。水脈や鉱脈だけでなく、行方不明になつ

た人物など、あらゆる失せ物探しの道具として効力を発揮したとも伝えられる。旧ソ連で、軍事目的でこの研究が行われたことも前に述べた。

現代に伝わるものの形状はさまざままで、直角に折り曲げた金属棒二本のセットとか、ひもの先にぶら下げたプラスチックの容器や水晶玉、電子部品を組み込んだ円筒状の本体から、プラスチックや竹でできた筒を金属の鎖でぶら下げたものなどがある。

ただ、ぼくにはどうしても理解できない部分が多い。同じ物質どうしが引き合うという説明には、いくらか科学的根拠があるが、スチールの針金とか水晶玉が宝探し

の道具になると聞かされても納得できるものではない。また、金製品を入れた器具を現場で操作するならまだしも、地図の上（マップ・ダウジングという）で、なぜ探查ができるのだろうか。

そういうぼくも、天草では東村山市水道局方式の針金を使っているし、イタリア人の神父にマップ・ダウジングをやってもらって、その結果に心躍らされている。人間とはたわいないもので、不確かなことをやっていると、きほど、何かにすがりたいという心理がはたらくようだ。埋蔵金探しの世界では、占いやお告げに頼る人も多い。これもまた、梶川式同様、あちこちで問題を起こしてい

る。

畠山氏が、そういった「拝み屋」やダウジングのたぐいを嫌っていたのも、先入観や想像からではなく、実際にいろいろ試してみて、それでうまくいった例が一つもないばかりか、いつもトラブルの種になるからである。

でも、埋蔵金詐欺師が持ち歩いているものと同じと思われるその小道具を、ぼくは一度見てみたかった。悪いクセで、どうにも好奇心が抑えられないのだ。もし、探査料とか金の話が出たら、その場でお引き取り願えばいい。そこで、仲介者のB氏にとりあえず会うことを伝え、数日後に渋谷の喫茶店で落ち合うことにした。その年の

十二月に入っただばかりのところだったろうか。

予想に反して、B氏は六十歳前後の、身なりのきちんとした物腰も柔らい紳士だった。

「探知器を使うのはMさんという人です。本業は鉱物資  
源の探査で、メキシコあたりでオパールを探したりして  
いるようです。ある人の紹介で知り合い、私も初めは半  
信半疑だったんですが、髪の毛一本あれば、その持ち主  
がどこにいても探し出しちゃうんです。いつだったか、  
この渋谷で、私は髪の毛を抜いて渡し、雑踏に紛れて西  
武デパートのほうに行って隠れていたんですよ。ところ  
が、すぐに追いつかれましたね。驚いたのなんのって」



ほんとうだろうか。でも、話を聞けば、M氏は例の北海道で問題を起こした人物でないことは確かだった。名前も、住んでいる場所も全然ちがう。新聞や雑誌でぼくのことを知ったのはB氏で、天草の件に関心を持ち、M氏に探査をやらせてみたいと考えたのだ。幸い、探査料のことはまったく口にせず、もし、宝が見つかったらなにがしかの謝礼をとという程度の要望だったから、これなら一つ試してみてもいいかなと心が動いた。

ただ、天草まで二人に来てもらうとなると、旅費はこちらで負担しなければならぬから、ちよつとつらい。でも近場なら。そうそう、一度は諦めた千葉の市原があ

るではないか。

「実は、いまやっている現場が近くにあるんですよ。房総のほうです。一日ご足労願うだけで、白黒つくと思うんですが」

「いいですよ。あなたがおっしゃるところならどこでも行きますよ。必ずお役に立てると思いますよ」

すぐに山城氏にも連絡を取り、それから一週間後に探查をやってもらうことが決まった。B氏には、詳しい場所はもちろんのこと、どんないわれの埋蔵金を狙っているかについても、ひとこともしゃべっていない。ダウジングに自信があるのなら、予備知識ゼロで、純粹に道具

の効果を示してもらおうと考えたからだ。

当日の朝、ぼくは山城氏の運転する車で千葉へ向かった。山城グループのF君も同乗する。B氏とM氏とは、午前十一時に外房線の誉田駅ほんだで待ち合わせをしていた。そこから現場までは、直線距離で約六キロ。

交通渋滞のため約束の時間ぎりぎりだに着くと、二人はすでに人気の少ない駅前に立っていた。初めて会うM氏は、紺の地味なスーツにきちんとネクタイを締めてはいたが、どちらかというと仲元氏と同じタイプの、現場の仕事が似合う感じの人だった。中肉中背、ポマードで

塗り固めた黒々とした頭髮、黒ぶちの分厚い眼鏡。年齢はB氏と同じ六十歳前後と思われる。けっして悪い人には見えない。

ぼくたちは先方の言うとおりに、人目につかない場所に移動した。そして、地面に地図を広げた。二万五千分の一の地図を四枚つなぎあわせたものだ。その上に方位磁石をのせて方角を正確に合わせる。M氏は、シヨルダーバッグからいよいよその道具を取り出すと、地図の上にかざした。まずはマップ・ダウジングから。

M氏が握りしめる直径二センチ、長さ十五センチほどの金属の筒の先端から、細い金属の鎖でぶら下げられた

竹筒が、思いのほか早く動き始めた。一定の方向に振れ、振幅をしないで大きくしている。地図上のある一点に引っぱられているようにも見える。山城氏がニヤリとした。

「おもしろいじゃないですか。向かっていますよ」

若いF君は、不思議そうに首をひねっている。M氏は筒を手になめ、どうだといわんばかりにぼくたちの顔を眺めまわした。

「いい線いってますよ」

山城氏が言う。でも、まだこのときも、金剛地の場所を二人には打ち明けていない。

「じゃあ、出発しましょう。途中の適当なところで一度停めてください」

M氏に促されて、ぼくたち五人は車に乗り込み、市道を南下する。そして、三キロほど走ったところで、道路脇に手ごろなスペースを見つけ、停車した。

前と同じ作業をくり返す。再び、竹筒は往復運動を開始した。まちがいなく、それは金剛地の方へ引っぱられている。緊張感がみなぎり、交わす言葉が少なくなっていた。

車に戻り、先を急ぐ。M氏は、もう探査機をバッグに戻そうとはしなかった。

(現場で、いったいどんな反応を見せるのだろうか)

助手席のぼくは、胸が高鳴り、口の中の渴きを感じていた。山城氏も無言でハンドルを握りしめている。

金剛地に到着した。火の見櫓が建つバス停の前で、山城氏は車を止め、サイドブレーキを引いた。ぼくたちがいくつかの穴を掘った現場は、そこから三百メートルほど先だ。すると、後部座席にいたM氏が真っ先にとび出し、足早にどんどん歩き出した。ぼくたちはあわててそのあとを追った。

「こつちだ、こつちだ」

探査器が激しく振れ、それに引きずられるように、M

氏は前のめりになりながら県道を横断し、枯れた稲株が残るたんぼの間の細い私道に入っていく。その先にあるのは本宮寺だ。予想外のことだった。計画では、火の見櫓の前で、

「現場はもう近いですから、ここからは地図なしでやってみてください」

と頼むつもりだった。完全にM氏に機先を制された格好だ。

M氏は、ただの一度も立ち止まることなく、まっすぐに二百メートル以上を進み、ぼくたちが「天ノ七宝坂」とよんでいた寺の参道への曲がり角で、ピタッと足を止



めた。そして、脇の草むらへ四歩か五歩入り込んだ。見ると、竹筒は遊園地の飛行塔のような円運動を始めている。ぼくはあつけにとられて、探知器とM氏の顔を見つめるばかりだった。

しばらくして、M氏が口を開いた。

「深さが六メートルほど、物の重さはだいたい四十キロというところでしようかね」

山城氏とぼくの視線が合った。

(信じないわけにはいかないだろう)

お互いにそう考えているのがわかった。深さはともかく、以前から黄金二千八百枚の重量は、一枚が十五グラ

ムと考えて単純計算で四十二キロと踏んでいたし、何よりも、ぼくたちが掘った四つの穴と、M氏が示す場所とは数十メートルしか離れていないのだ。

彼は、ぼくたちがこれまでやってきたことについて、何も知らないはずだった。一週間の間に事前調査して、つじつま合わせをしたなんて考えられない。そこで初めて、ぼくは胸の内にたまっていたものを吐き出した。

「驚きましたね。実は、ここ数カ月、ぼくらが発掘調査をしていた場所は、ほんの目と鼻の先なんですよ。物の重さも、こちらの考えとぴったりといってもいいほどです」

M氏もB氏も、ニンマリとしてうなずいた。

「こうなったら、そこを掘るしかないですね」

山城氏も心を決めたようだ。八門遁甲的解釈は後回しにしてもいいというのか。ところが、そうではなかった。彼はすでに周囲の地形を観察して、以前から頭に入っているものと絡め合わせ、一つの推論を導き出していた。

「この上も坂になってますよね。いまは竹やぶですが、昔は道がついていた可能性があります。ここを登り切ると、ちょうど正面に熊野神社の鳥居があるはずですよ。熊野神社といえば、成島家が長きにわたって氏子代表を務めるなど、切っても切れない関係で、しかも東南の方向

にあるから、ひよつと  
したら第二の基点は鳥  
居なのかもしれませ  
ん」

「なるほど。すると、  
この坂が『天ノ七宝  
坂』ってわけか。確か  
に、ここは坂の入り口  
といえますよね」

ぼくもうなるしかな  
かった。そしてすぐに



第二の「天ノ七宝坂」の可能性が出てきた坂道

発掘の日程が決まった。なお、探査料の話は、この日も二人の口から出ることはまったくなく、ぼくはほっと胸をなで下ろした。

（今度こそ最後だ。これでだめなら、やはり成島家の埋蔵金は存在しないということだ）

そんな思いで、暮れもおしせまったころ、ぼくたちはシヨベルをかついで三たび房総へ向かった。

埋蔵金が見つからない場合、その理由としては次の三つが考えられる。

①伝説そのものが根も葉もない作り話である。

②埋蔵されたのは事実だが、すでに誰かが掘り出してしまった。

③宝はまだ地下に眠っているが、場所がちがっている。

前回の発掘で、山城氏とぼくは失敗の理由を無理矢理②のケースにあてはめた。だが、ダウジングの結果は③を示しているのだ。それを信じていいものかどうか、帰ってきてからも迷いに迷った。ヘタをすると、よくありがちな埋蔵金アリ地獄にはまってしまうが、どうにも不思議でならず、ケリをつけるにはそのポイントを掘ってみるしかない。時間やカネがかかりすぎるなら考えものだが、たいしたことはない。

その結果はというと、またしても空振りだった。砂混じりのとても掘りやすい土壌で、予定の六メートルまで掘るのに二日しかかからなかったのだが、まったく手応えなし。五・五メートルを過ぎたところで、白っぽい砂と茶色っぽい砂の縞模様の地層が現れ、その中から化石になる途中の貝が出てきた。これはもう、一度も人の手が入ったことのない自然層とみるしかない。しかも、地下水がわき出してきた。ダウジングも奇跡は起こしてくれなかったのだ。

ところで、M氏とB氏だが、ぼくたちは当然二人が発掘に立ち会うものと思っていたのに、一度も姿を見せな

かった。ダウジングに自信をもっているのなら、発掘の結果が気になるはずなのだが、どうしたことだろう。帰京後、ぼくが電話で報告したとき、M氏はひとこと「おかしいですねえ」とつぶやいただけだった。それ以後、二人からの連絡はぷつぷつりと途絶え、こちらからもコンタクトをとっていないので、消息はわからない。

それから十四年後の一九九二（平成四）年のこと。朝日放送制作のテレビ番組「平成ふしぎ探検隊」で埋蔵金の発掘をやることになり、スタッフから素材と場所の相談を受けたときに、ぼくは市原を提案した。謎文の解読



のおもしろさがあることと、ダウジングで掘った場所にまだ一パーセントほどの希望をもっていたからだ。

（あのときは、ぴったり六メートルまでしか掘らなかつたが、あと五十センチ、いや十センチ掘れば黄金が姿を現すかもしれない）

諦めの悪い自分に多少腹が立つ。でも、それなりの理由はあった。あの穴は斜面の下に位置しているから、雨でも降れば上の方から少しずつ土砂が流れてくるはず。二百年もたてば、それが数メートルの層を形成したとしても不思議はない。それに、謎文の中の「砂中の石櫃」という言葉も気にかかっていた。あんなきれいな砂は、

ほかでは見られなかった。

同年五月、本宮寺住職の快諾を得て、境内に大きなテントが設営され、収録がスタートした。成島家のおばあちゃんの話と謎文の紹介、そして、山城赤心氏による謎解きをそのままいただいて、ターゲットは本宮寺周辺とし、さまざまな方法でポイント探しを展開した。

テレビ番組らしく、いろんなキャラクターが登場する。女性霊感師、ダウジング・ロッドを操る自称鉱物探査技術者、遺跡調査に活躍している地中レーダー技師ら。その中でぼくがもつとも信頼したのが、地中レーダー技師の渡辺<sup>わたなべ</sup>広勝<sup>ひろかつ</sup>氏だ。渡辺氏は期待通り、参道から石段を上

がった山門のすぐ前で、不思議なものを探り当ててくれた。空洞である。素人目にはわからないが、深さ三メートルまでの地下の様子を映し出すカラーモニターに、何層かに重なり合う半円形の縞模様が現れ、渡辺氏はまちがいなく穴があると断言した。

山城流の八門遁甲では割り出すことのできなかつたポイントだ。もしできたとしても、以前は山門のすぐ近くを掘るなんて考えられなかつた。今回は幸い住職の許可も下りたので、待機していた地元の土建屋さんに掘ってもらうことになった。あまり大きな穴は掘れないから、山芋掘りに使うはさみスコップを使う。空洞の天井まで

は一・二メートル。

はたして、ぴったりのところで空洞が見つかった。最初は十円玉ぐらいの、ブラックホールのような闇が現れ、それがしだいに広がっていく。でも、掘り下ろした穴の直径は五十センチもないから、人が入っていくことはできない。そこで、直径十センチぐらいの空間ができたところで、竿の先に取りつけた小型のCCDカメラを突っ込んでみた。テレビ番組だから、こんなこともできるのだ。一同の視線がモニターの画面に集まる。

空洞の高さは五、六十センチ、底面の直径は一メートル弱と思われた。動物が冬ごもりする穴のような感じだ

が、まさかそんなことはあるまい。だが、それを確認する必要がある。タヌキかなんかが掘った穴だったら、どこかに入り口があるはずだ。スタッフと出演者がいつせいに石段を下りて、周囲を見て回る。

「あった！」

A Dの一人がそれを発



山門の前の地下 1.2 m のところに空洞が見つかった瞬間

見した。笹と雑草で入り口がふさがれていたが、空洞に向かう横穴があったのだ。でも、タヌキのしわざにしては大きすぎる。大人でも腹ばいになれば入っていけるほどである。ただ、奥の方は天井が落ちたか、ぐっと狭まっていた。再びCCDカメラの出番だ。

今度は、穴の全容がよくわかった。サイズは上から見るとときとほぼ同じだったが、奥にひな壇のようなものがある。平らにならされているような感じで、どう見ても人工のものと思えない。黄金二千八百枚の総量を具体的なイメージでとらえると、だいたい「広辞苑」一冊分とみていたから、スペース的にも合う。

(あそこに、黄金の入った箱が置かれていたのかもしれない)

例のイモの貯蔵庫よりは、ずっとその可能性が高い。だが、もしそうなら、なぜ横から掘ったのか。横穴の奥行きは四メートル以上。縦穴を一・二メートル掘るのと比べると、労力と危険性の点で雲泥の差がある。やっぱり盗み掘りだろう。山門の真ん前で縦穴を掘れば、どうしたって人目につくから、こっそりやるなら横から掘るしかない。

それにしても、どんな探查方法をとったのかわからないが、横から掘ってピタリとそこへたどり着いた技術に

は驚かされる。いやいや、そんなことがあるだろうか。ちよつと考えすぎかもしれない。何らかの根拠はあったと思うが、その空洞は、金山のように狸掘りで掘り進んでいった探索者が、「あと十センチ、もうあと十センチ」と、なかなか諦めきれず、そして最後の力をふりしぼつて広げた穴で、宝蔵ではなかったのかもしれない。結局、番組では何者かが盗掘したということにして、それがオチとなった。

最後に、十四年前に掘った穴をもう一度掘り返した。ぼくの主義ではないが重機を使った。はるかにラクだし仕事はやい。三十分もたたないうちに、予定の六メー



トルに達し、見覚えのある縞模様の地層が現れて、土中から錆びたバケツが出土した。十四年前に土を引き揚げるためにぼくたちが使ったものだ。さらに深く掘り下げたのだが、以前と同じように砂の層が続くだけで、黄金が現れる気配はみじんもなかった。

収録を終えて帰京した次の日だっただろうか。骨休めをしていたぼくのところには、地中レーダー技師の渡辺氏から電話がかかってきた。

「データを改めて分析していたら、もう一カ所、気になるところが出てきたんだよ。山門を挟んで、こないだ掘った穴の反対側、つまり、境内の中になるわけだけど、深

さ五十センチくらいのところ、上から見ると四十センチ四方ほどの、周りと異質な地層があるんだ。自然のものとは思えないし、これまでの経験からいうと、たぶん砂の層だな。謎文の中の『砂中の石櫃』という言葉には、ここのほうがピッタリだと思うんだけどねえ」

話を聞きながら地中の様子を頭に描き、ぼくは胸の高鳴りを感じていた。渡辺氏はすでに番組の制作会社に連絡をとって、スタッフもその気になっているという。

二日後、最終のオプショナル発掘が実施された。住職も事情を聞いているから、目の色を変えて待機している。作業はまた地元の土建屋さん。深さ五十センチだから、

たかがしれている。ぼくやADたちで掘ってもよかったのだが、スタッフは土建屋さんの社長をはじめ、若い作業員たちとすっかり仲良くなっていたので、もし何かが出てきたときのことを考えて、最後まで参加してもらおうとの配慮だったようだ。

渡辺氏の分析どおり、地下五十センチのところでは急に土の色が変わり、砂地が現れた。しかし、結局は人為的につくられたとしか思えない砂の層があっただけで、中に何かが入められていることはなかった。ここも盗掘のあとなのだろうか。

「だれが掘り出したか、だいたい想像がつくけどね」

渡辺氏がポツリと言った。

(えっ?)

彼の頭の中にある人物について、おおよそ察しはついた。それまで、現場でたびたび話題にのぼっていた地元  
の資産家のことだ。ぼくは笑い話のネタとしか考えてい  
なかつたのだが、渡辺氏は本気でそう思っていたのだろ  
うか。確かめたかったが、その機会を逸してしまった。

国内の古代の遺構や古い城跡だけでなく、エジプトや  
中東、南米などの遺跡の調査で実績をあげた渡辺広勝氏  
とは、その後も個人的な付き合いが続いた。事務所を訪  
ねたこともあったし、群馬県内の数カ所の調査を、無償

でやってもらったりもした。こちらは遠慮しいしいお願いするのだが、いつも気軽に応じてくれた。なんとなく気が合ったのは、手法がまったく違いうえに、向こうはちゃんとした仕事だったが、不確かなことを自分の手で確かめたいという、共通する思いがお互いの行動の根底にあったからかもしれない

数年後、別のテレビ番組でもう一度、市原で発掘をやったことがある。このときも、渡辺氏の地中レーダーが休耕田の地下一メートル強のところまで異物をとらえた。ウツチャンこと内村光良氏といっしょに掘ったところ、出てきたのは巨大な木の根っこだった。

それから長い間、渡辺氏とは交流がなく、久しぶりにその顔を見たのはテレビ画面の中だった。二〇一五年、エジプトの王家の谷にあるツタンカーメンの王墓の中に、隠し部屋らしいものを探り当てたのだ。ツタンカーメンの義母にあたるネフェルティティの墓かもしれないと騒がれたが、現在はその説は否定されている。

その四年後の二〇一九年、渡辺氏が病氣のために急逝したことを人づてに聞いた。ぼくより五歳年上だったが、七十七歳の惜しまれる死だった。もつともつと話をしたかった。聞きたいこともたくさんあったのに、残念でない。